

音楽指導技術向上を目指した授業の構想

—指導実技研究を中心とした地域貢献活動—

牛渡克之*, 菊池真理子・小川暁美**, 赤坂裕子***

*岩手大学教育学部, **岩手大学教育学部附属小学校,

***岩手大学教育学部附属中学校

(平成28年3月2日受理)

1. はじめに

プロアマ問わず、指導者として学習に困ることに指揮法とジャズ音楽がある。指揮法を学ぶためにはオーケストラなどの合奏体が必要なため、人口の多い都市部では比較的容易であるが、地方では学習の機会を得ることが困難である。また、これだけ世の中の音楽がジャズ・ポップス音楽にまみれていながら、それを系統的に学習することは大変難しい。大抵の音楽指導者はクラシック音楽の教育を受けている。ジャズ・ポップス音楽はクラシックとは感覚的に大きくかけ離れているので指導法を身につけることはとても難しい。

指揮法もジャズ・ポップス音楽も教員はもちろん、音楽を扱う全ての人が学んで役に立つものである。本研究は、岩手県の教員だけでなく、一般のアマチュア、高大学生の学生指導者のような若い人に対しても実践的な学習の機会になるように留意した。

2. 方法

以下の講習会を開催した。

(1) 小林恵子・指揮法講習会

日程：2015年11月21日(土) 10:30~18:30

会場：岩手大学芸術棟 4階 401室

内容：ピアノ2台による指揮法の講習

ピアニスト=井上彩花, 水野日香梨, 阿部真優香, 鳥居紗季

(2) ニール・ストルネイカー・ジャズ演奏法講習会

日程：2016年2月11日(木祝) 10:00~18:00

会場：北桐ホール

内容：ビッグバンド、室内楽、ジャズコンボによるモデルバンドを使ったマスタークラス

3. 結果

(1) 小林恵子・指揮法講習会

この講習会は岩手大学音楽科学生(卒業生含む)、音楽サークル指導学生、教員で指揮を学ぶ必要がある人、一般の音楽指導者等を対象として市内音楽団体、教員、音楽指導者等に対し募集を行い、申込があった20人を受講生とした。指揮の講習は基本的に実習であり、聴講生は受け付けなかった。受講生の内訳は以下の通り。

プロ指揮者志望の大学生 1名(大学3年)

教職員(再任用含む) 7名

一般のアマチュア指導者 4名

学生のアマチュア指導者 1名

岩大音楽科学生 3名

高専・高校生 5名

事前に以下のような課題が与えられたが、今回は(B)のみを取り上げた。

(A) 「25の練習曲」(ブルグミュラー) より

No.1 「素直な心」

No.2 「アラベスク」

No.3 「パストラル(牧歌)」

No.4 「小さなつどい」

(B) 「ピアノソナタ第3番」C-Dur

第1楽章 Op.2-3 (ベートーベン)

(C) 「交響曲第35番より第1楽章」(ベートーベン)

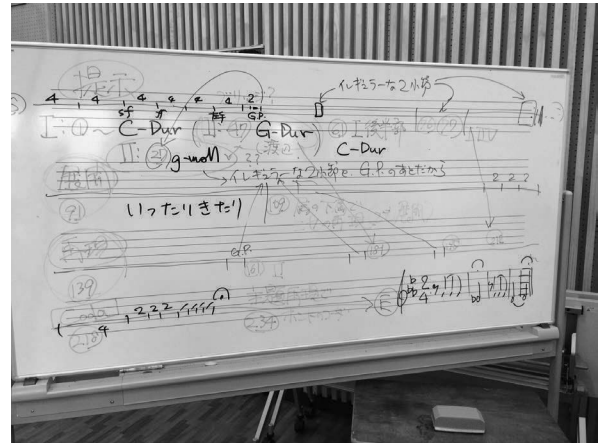


(画像 1)

まずベートーベンのピアノソナタ 1 楽章を使って、形式と和声の分析を行った。

指揮をすることは、作品に関するすべてのことを把握することであるから、作品の分析は必要不可欠である。その第一歩としてソナタ形式の分析学習をすることから開始した。今回は冒頭数時間を費やしてこの作業を全員で行い作品に対する理解を深めた。方法は以下の通りである。

- ・まず、形式を見つけるために、楽譜を短い単位に分割（2～8小節程度）おのおの何が起きているかをグループ発表させる。
- ・形式に変化が起きているところで調性がどう変化しているかをグループ発表させる。
- ・ソナタなのでソナタ形式であることを確認し、その形式上の特徴的なものがいつ起きているかを、グループ発表の結果と照らし合わせて確認する。(画像 1)
- ・長い楽章全体を短く分割し、それぞれに何が起きているか、その変化はソナタ形式上のどの部分にあたるのか、などを分析し発表した。(画像 2)



(画像 2)

ソナタ形式の分析後実習に移った。

ドミナント→トニックという和声の解決について、学校の教室ではピアノが弾く和音に合わせてお辞儀をする、ということを取りドミナント→トニックの和声進行を全員で動作して確認した。

次に実際に指揮をさせ、各受講生がいかにかソナタ形式や、和声の進行と関係無く図形だけを示しているかを確認した。ともすると指揮をすることは単に何拍子かの図形を描くことだけになってしまいがちなのだが、いったん図形から意識を離れさせることでより音楽の本質を手や表情で表すという訓練になる。またこのやり方をより深めて、エア楽器、顔、動作、走る、飛ぶ、踊る等、様々な方法、つまり指揮以外の方法で指揮をする、ということも全員で行った。指揮法の上級者ほど図形への執着が強く、講師は何回も「図形は描かないで」という指示を行ったものの、なかなかそれが出来ずに苦勞する受講生も見られた。逆に予備知識のない高校生などがむしろ自由に表現を行えるので、ベテラン受講生を唸らせる場面も多くあり、固定観念にしばられずに指揮することの重要性を痛感させられた。

実習において印象深かった例があるので紹介する。

例 1 =

ある大学生の場合。彼は出来れば将来プロの指揮者になりたいとの希望を持ってこの講習会を受講した。しかしまだ彼の音楽的な意志が指揮によって正しく表現されていないことから「エアープiano」によるレッスンをを行った。これは自分の得意な楽器での演奏では、必ずより合理的な身体の運動を行っている、という理由から、指揮においても適切な身体の運動を体得させるために行うものである。彼のケースはピアノを弾く動作をさせて指揮の代わりとしたのだが、ピアノを弾く動作からも音楽表現がうまく表出出来ないのが、今後指揮をするだけでなく、ピアノや声楽を通じて音楽表現能力を伸ばすようアドバイスがあった。

例 2＝

県内高校生1年生の場合。この生徒は部活動での次期学生指揮者として選ばれ、講習会の時点では実際に指揮台に立った経験がなかった。当初は遠慮がちだった身体の動きが、講師の適切な声かけによってだんだんと自信に満ちた表情、大胆な身体の動きに変化し、そのためにピアニストも生き生きと演奏して音色が変わっていく、という過程を見ることが出来た。その変化は、その場にいた全ての受講生が感じることが出来るほどであったため、演奏が終わると大きな拍手が起こった。

(2) ニール・ストルネイカー・ジャズ演奏法講習会

冒頭イントロダクションとして1時間を用意し、ジャズ演奏法の概念のようなものを聞こうとおもっていたのだが、意に反して出席者へ質問を促して講習が開始した。

最初の質問はある大学生からのもので、「自分は一人で練習するときにはうまくいくのに、仲間と演奏すると緊張して力が入るのだがどうしたら良いか」という質問だった。

「どうして君は仲間と演奏するときに緊張を感じるのだろうか？」

「仲間にもっと良く思われたい、下手なやつと思

われたくないのではないかと？」

「40歳頃までは自分もそうだったが、自分を良く見せることはやめて、自分がいかに音楽を大切にしているか、自分の音楽を聴衆に示すことの方が重要ではないか？」

という回答があった。私自身演奏に携わる立場なので、この学生の気持ちはよくわかる。この回答、アドバイスはプロとして演奏をする私にも大変参考になるものであった。

このようにこの講習会は単なるジャズの演奏技術にとどまらず深い内容を持っていたことをまず記したいと思う。



(画像3)

まず、最初に「ビッグバンド」と呼ばれるトランペット、トロンボーン、サクソフォーンの3種類の管楽器と、ドラム、ギター、ピアノ、ベースのリズムセクションによる、約20名のオーケストラによる演奏に対してレッスンをを行った。(画像3)

ジャズは自由奔放で良い、というイメージがあるが、たとえジャズであっても合奏体は一つのチームであるのでエゴは許されない。ビッグバンドの指示系統はまずドラムスと1番トランペット奏者が互いに聞きあうことで始まり、ドラムはベー

ス、ピアノ、ギターなどのリズム楽器とコンタクトを持ち、1番トランペット奏者は横の2、3番トランペット奏者に演奏の方向性を示唆する責任がある、ということ 강조했다。

チームとしてのまとまりは、強弱、リズム、音程などに問題があると失われてしまう。

講習中、ある箇所のトランペットセクションの音合わせを行ったところ、突然全体のサウンドが良くなって驚かされた。講師によると「和音が合っていればがんばって演奏しなくても大きなサウンドが得られるもので、音が合わないままいたずらに大きな音で吹くことは避けた方が良い」ということであった。

次にコンボでの演奏に対してレッスンを行った。ジャズ演奏の際、数名の小さい編成を「コンボ」と呼ぶ。コンボでの演奏の際も、チームとしてのまとまりを考えるように強調していた。クラシックにおける「室内楽」の扱いに共通しているように思えた。

コンボでの特徴は、アドリブの演奏の重要さである。アドリブの演奏の上達のためには、

第1ステージ＝メロディを覚える。楽譜を見るのではなく、CD等の演奏を耳で聞き取り、メロディを覚えなくてはならない。

第2ステージ＝コード（和音）やスケール（音階）を理解する。例えばCm7を例に挙げた場合、その構成音をいかなるリズムやテンポでも演奏出来るようにする。またCm7上の適した音階を選び（今回はC-ドリアンスケール）、3度、4度、5度音程等、いかなる変形した音階でも演奏出来るように練習を積まなければならない。

第3ステージ＝過去の名手のアドリブをそっくりそのままコピーし演奏出来るようにする。

という3段階の学習法が示された。どれも時間を要するものだが、音楽の学習には要領や効率は

存在せず、ひたすら時間とエネルギーを費やして繰り返し練習するしかない、ということ 강조했다。

また講師からは、

- ・アドリブは瞬間的な作曲であり、作曲家との違いは楽譜に残すか残さないかの差しかない。

- ・ジャズの特徴は必ずブルースの要素が存在すること。

- ・アドリブは小さな動機をある一定のムード（ストーリーとも言うが）に従って展開させてゆくことが大切で、これはクラシックにおける交響曲の作曲の手法とも共通する。

と言うような指摘があった。

そのほか、アドリブの際、メロディと違うラインを見つけ（多くは和音の3度、7度等をたどることで見いだされる）、それをアドリブのラインとして利用するやり方、また、ピアニストはソリストがどの音を選ぶのかによって、自分の弾いている和音を巧みに変形させるテクニックも必要、またドラム奏者はピアニストが弾いているリズムパターンを良く聞き反応する必要があることなど、実際のトレーニング方法を示しながら高度なジャズ演奏法も紹介していた。

ビッグバンド3チーム、トロンボーンカルテット1チーム、コンボ2チームのレッスン後は再び質疑応答となり、演奏時の心構えなど示唆に富む話が聞けた。

4. 考察とまとめ

(1) 小林恵子・指揮法講習会

今回の指揮法講習によって、指揮は学習が困難な割にはその機会が少なく、特に地方ではその傾向が強いことを再確認した。しかし今回の講師のように職業指揮者の中にも、指揮法教育に関心をもち、このような講習会の講師を積極的に務めてくれる人も多くなってきている。機会は私達が本

気で望めば得ることが出来そうである。今回の講師によって、各地での指揮法講習会の例を聞くことができた。

また熱心な人ほどこの種の講習会に参加を望み、実際受講すれば教育現場等で上達を実感することが出来るのでまたリピーターになる、ということが確認された。この講習会は2年間に4回開催したが、かなり多くの受講生が繰り返し受講している。

面白いことに指揮学習はあまりレベルの差を問題としない。今回もプロ指揮者を目指す大学生と、指揮台に立ったこともない高校生が一緒に受講したが全く問題なく講習会が成立した。指導者の質にもよるものの、指揮法は単なる技術習得が重要なのではなく、もっと音楽についての考え方を学ぶものであることが示されたように思う。受講者数も当初想定していたより多く、自分を含めて指揮の学習を求めている人は幅広い層に存在することがわかった。もっと多く開催し、より多くの人々が指揮学習の機会に触れられるように方法を講じていきたいと思う。

(2) ニール・ストルネイカー・ジャズ演奏法講習会

講師本人も強調していたが、とにかく人はジャズとクラシックの違いを言い立てることが多いが、むしろ共通していることが多くあることに驚かされた。講師は大学卒業まではジャズと平行してクラシック音楽の教育を受け、管弦楽、吹奏楽（ワシントンDCの海軍軍楽隊に所属していた経歴もある）の経験も豊富である。クラシック音楽への造詣も深くバルトークの弦楽四重奏に興味を持っていて研究中とのこと。ジャズでもクラシックでも、時間をかけてゆっくりと準備していくことが、結局上達の早道なのだとすることを学んだ。

分担の関係で一人で準備したため宣伝が不足した。またジャズ演奏法講習会は講師と私達と日程調整がうまくいかず2月の開催となり、恐らく時期が悪かったのであろう、教員の参加者が少なかったのが残念であった。もっとたくさんの人に講

習を体験して欲しかった。

指揮講習会では今回集まった20名程度が限界であり、あとは回数を増やすことしか出来ない。

いずれの講習会も教員はもちろんのこと、アマチュア愛好家、生徒などあらゆる層に効果のある内容であった。今後また機会を持つことが出来ればもっと多くの人々にアピールし岩手県の教育の向上に貢献したいと思う。